act 40

art, culture, tradition

［発行］札幌市教育文化会館
アクト第40号
March 2022

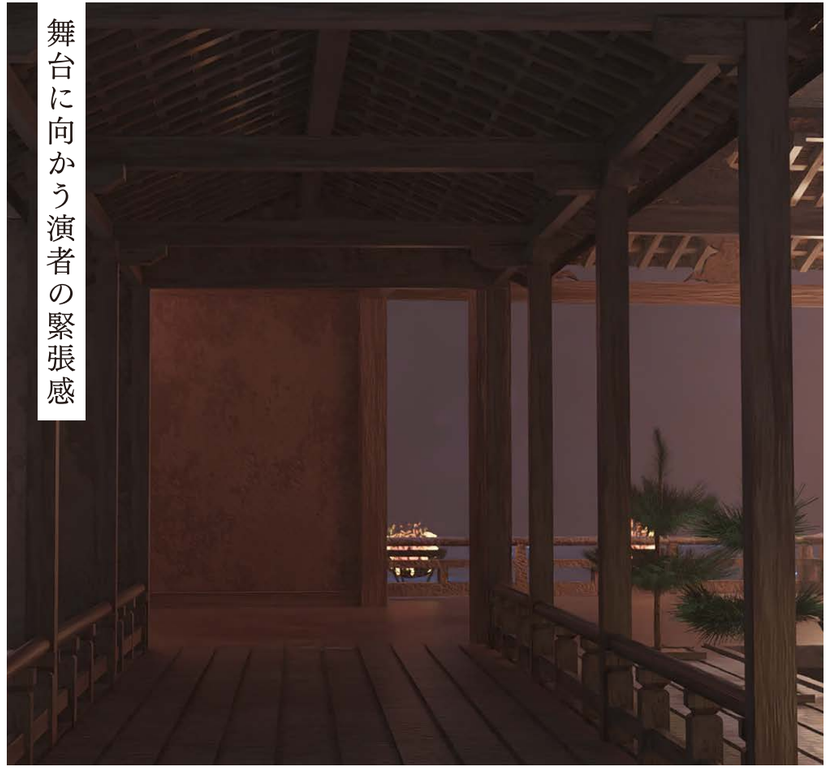
能舞台

能舞台から紐解く能の魅力

新型コロナウイルス感染症の流行下、舞台芸術においても配信やVR（仮想現実）などデジタルベースの探求が行われています。教文でも、デジタルとリアルが相互作用しながら舞台芸術の新しい価値や魅力が伝わるような取り組みを模索中です。今回はその一環として教文能舞台を3DCGで忠実に再現。能舞台から紐解く能の魅力とともに、「水上に登場した教文能舞台」という架空の世界をお楽しみください。

船で舞台入りする水上能舞台

水上の能舞台というと、海中に建つ厳島神社能舞台（広島）や池の中に建つ身曾岐神社能楽殿（山梨）があり、
水面に映る演者の姿も相まって幻想的な美しさは格別。教文能舞台が建つのは、
果たして海か広大な湖か？こんな能舞台なら演者も船で舞台入り…と想像が広がります。



舞台に向かう演者の緊張感

教文能舞台の竣工図を元に製作された3DCG能舞台では、実際の上演時に観客が決して見ることのできない、
演者視点で舞台を見ることも可能です。例えば、揚幕を背に橋掛りから見る本舞台。
橋掛りを渡ってくる演者の緊張感を感じることのできる眺めです。

屋外能舞台での幻想的な薪能

全国各地の寺社境内に現存する屋外能舞台を中心に、夏から秋にかけて催されることの多い薪能。
能舞台の周囲にかがり火を焚いて演じられ、過去には教文の周年記念事業として上演されたことも。
神事としての能の雰囲気を色濃く感じられる、神秘的な世界です。

能の歩みとともに 変遷してきた能舞台

能舞台の歴史 History of Noh Stage

**能舞台は屋外に仮設から常設へ、そして明治以降に屋内常設の能楽堂へと変遷してきました。
公演ごとに大ホール内に設営される教文能舞台は、新旧ミックスの設置スタイルと言えるかも？
細部をさまざまな角度で見ることのできる3DCG能舞台製作（※）に合わせて、能舞台の歴史や構造をご紹介します。**

※3DCGデータは後日教文公式サイトで公開予定

鎌倉時代に寺社と結びつき祭礼に奉仕するようになった猿楽（能楽のかつての呼び名）。寺社の祭礼で老翁の姿の神を演じるのは猿楽者にとって重要な仕事で、この頃の舞台はその都度設けられていました。室町時代前期には寺社での祭礼に加え、橋の再建などの寄付集めを名目とした能が催され、観客は空き地や河原などに仮設された舞台四方から見物したようです。室町後期になると、将軍が家臣の邸宅を訪問（御成）する際のもてなしとして能が上演され、仮設ではあってもしっかりとした屋外能舞台が作られるようになります。安土桃山時代になると、能にのめり込んだ豊臣秀吉によって大阪城で盛んに能が上演され、御成も盛んに行ったことで、多くの常設・仮設舞台が屋外に設置されます（※1）。

江戸時代になると能は幕府の式楽（公式芸能）に位置付けられ、お祝いや特別な客人の最高のもてなしとして能の催しが頻繁に行われ、さらには将軍の教養・娯楽でもあったため、江戸城内には屋外常設能舞台が複数設けられます。諸藩の大名も、御成や自藩の式典、慰労、他藩との交流のために、江戸藩邸や国元の城内に能舞台を構えました。ちなみに能舞台を建設する際は、幕府お抱え宮大工の元へ大工を修業に出し、技術と伝聞を持ち帰ったそうです。庶民も、江戸城や諸藩の城に町人が招待されて行われる能や、寺社の祭礼で行われる能などを見る機会があり、ゴザなどを敷いてのどかに能を楽しみました。

明治維新が起こると、江戸幕府や大名が抱えていた能役者の多くが廃業を余儀なくされますが、華族らが保護に向けて動き出します。また、外国からの客人をもてなすための芸能として能が位置付けられ、日本初の能楽の専門劇場として1881年に芝能楽堂（※2）が完成します。その後の改築で多くの人が観覧できるよう見所（観客席）が拡大され、上には屋根がかけられました。昭和になると建築技術や室内での観覧に必要な照明技術の普及により、大屋根の下に見所や舞台を屋根ごとすっぽりと収める、現在の能楽堂のスタイルが完成します。伝統的な様式を保持した能舞台とそれを内包する近代的なデザインの大空間という、建物の外側と内側が異なる意匠を持つユニークな設計手法が能楽堂の定番となりました。こうして天候や周囲の環境音を気にすることなく、いつでも能楽を楽しむことが可能になったのです。

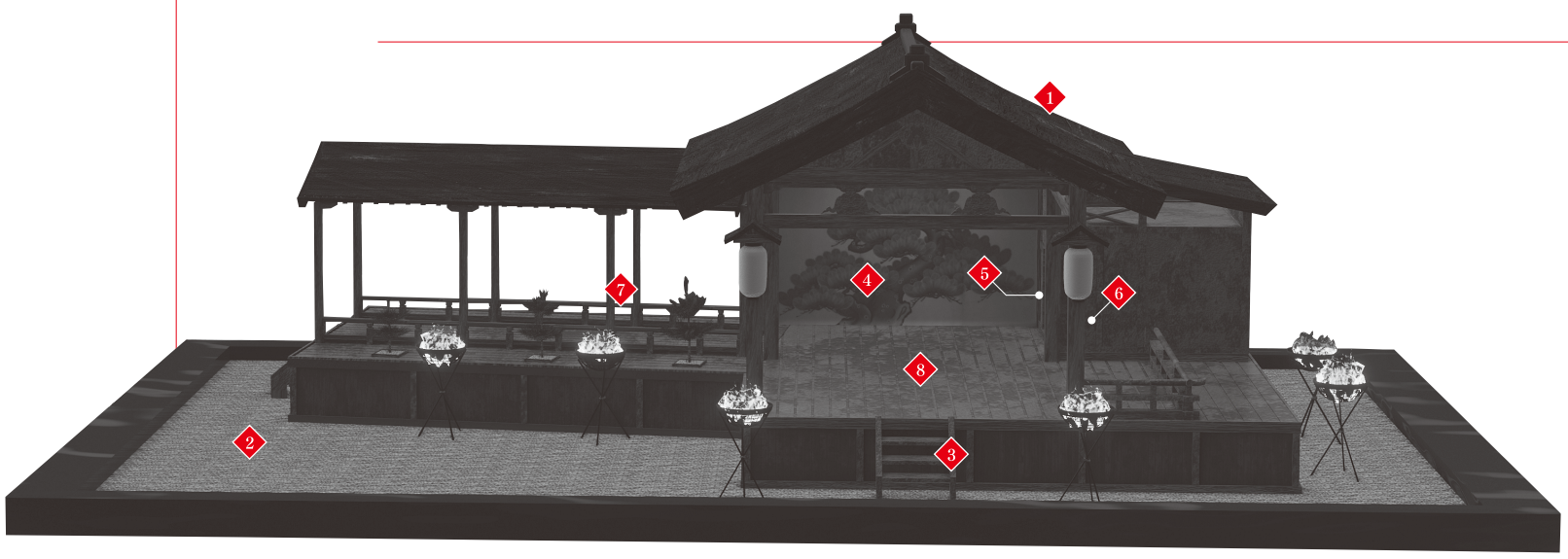
〈注釈〉

※1）この時代の遺構として、現存最古の能舞台として知られる西本願寺の能舞台や、秀吉が将兵の慰労用に作らせたという沼名前神社能舞台があります。

※2）その後、靖國神社に奉納する形で移設され、現在は靖國神社能楽堂と呼ばれます。

〈参考文献〉

カラー百科 見る・知る・読む 能舞台の世界（勉誠出版）
能舞台 歴史を巡る（建築画報社）



能舞台解説 Construction of Noh Stage

長い能の歴史や変遷を感じられる舞台形式の一部をピックアップ！

1 屋根
本舞台の屋根は社寺や城郭等の古建築に共通する伝統的な形状で、切妻、寄棟、入母屋の三つがある。教文の能舞台は切妻屋根で、国立能楽堂もこのタイプ。

2 白州
屋外で見所との間に地面があった頃の名残。見所が拡大後も舞台周辺にわずかな幅の敷砂利が残って引き継がれ、舞台と客席を隔てる結界の役割を果たしている。

3 階（きざはし）
将軍が観る公式な舞台で、寺社奉行が演能の開始を命じるときや賜り物があるときなどに使用されたとされる通り道。現在はほぼ使用されない。

4 鏡板
江戸時代には式楽としての管理のもと、指定された下絵に沿って描かれた老松。明治以降に作られたものは、松の枝ぶりや佇まいに各舞台の個性が感じられる。

5 切戸口
地謡方や後見などが出入りする高さ1m強、幅1m強の引き戸。横羽目板（脇鏡板）には若竹の絵が描かれている。見所から見えにくく「忘れ口」とも呼ばれる。

6 貴人口
地謡座奥の壁にある、現在は使わない扉。立ったまま通ることができ、かつて位の高い人物が能を演じる際に頭を下げずに舞台に上がれるよう設けられたもの。

7 橋掛り
昔は深かった取付け角度は浅い角度へ変化。演者の通路でありながら、作品によっては幕の奥（幽界）と本舞台（現世）をつなぐ場に見立てられることもある。

8 本舞台
三間（約5.4m）四方の舞台にはヒノキが縦に張られている。音の反響や共鳴を高めるため元来床下に甕が埋められたが、現代の設備で甕のない能楽堂もある。

Imaginary Noh Stage

水上の教文能舞台。屋外だから楽しめる世界とは？

3DCGで魅せた「水上の教文能舞台」の世界をより遊ぶべく、稽古用の能舞台を所有する札幌喜多流哲門会（喜多流塩津哲生氏の門弟の会）会長の奥田康二さんにご協力いただき、屋外能舞台の魅力を交えて「水上の教文能舞台」のイメージを膨らませてみました。屋外だから楽しめるものとは？

「天気の良い日に屋外能舞台を経験すると、本当によくできていると実感します」と奥田さん。「舞台手前は光が入って明るいけれど、奥は薄暗いので、シテが暗闇から浮き出るように出てくる。これは能楽堂でなかなか味わえません。また、お能は正式には五曲を一日がかりで演じます。太陽が東にあるときは清々しい神様の曲目（初番目物）。真上にくると平家物語など男性の世界（二番目物）。少し西に陽が傾くと、源氏物語を主にした女性の色っぽい世界（三番目物）。そうして親子の別離や嫉妬に狂う女性などを描く曲目（四番目物）が続いて、陽がすっかり落ちた頃に鬼や怨霊の世界になる（五番目物）。よく考えられていますよね」。では、水上の教文能舞台で楽しむとしたら…？と想像を広げてみましょう。奥田さんが挙げてくれたのは、五番目物の『船弁慶』。静御前を残して源義経一行が船出すると、穏やかだった海上が一変。荒れ狂う波間に平家一門の怨霊が浮かび上がり、知盛の怨霊が長刀を振りかざして義経一行に襲いかかるというお話です。風や水の音を感じられる水上能舞台にふさわしく、架空の世界にとどめておくにはもったいないほど。ぜひ光景を想像してみてくださいね。

PROFILE

奥田 康二（オクダ コウジ）
故粟谷菊生師（喜多流シテ方 人間国宝）、故藤田大五郎師、一噌幸政師（ともに一噌流笛方 人間国宝）、現在は塩津哲生師（喜多流シテ方）、一噌幸弘師（一噌流笛方）、幸信吾師（幸流小鼓方）に師事。舞台は能シテ「船弁慶」「景清」他。日本能楽会会員、札幌能楽会会長、札幌喜多流哲門会会長。